

言語

指導 松村 康平

石田 佐久間

言語指導の方法―役割

松村 ことばと行為とのつながりはどういふふうになつてゐるかの研究をする場合、劇をとり入れる二つの実験を考えます。すなわち(1) おはなしを聞いて人形を動かす、それから次第に自分自身を動かすようになる。

動かしやすい家族の人形を紙などでつくり簡単な話をこちらで用意し、その話についてどこまで人形を動かすことが出来るか。(2) 人形をだまつて動かさせる。そして子どもに話をつけさせる。

これを幼児、小・中学生にさせて幼児の特徴を調べますと、(2)の場合のように、動きに対して話をつける方は子どもにとってやさしく出来ますが、(1)の場合は難しいのです。それは、「お母さんが太郎さん呼びました」と言うとき、子どもの中に役割の転換が用意

されていないからです。つまり、言語で指導をする前に、生活の中で役割をどういふふうにとれるかをはっきりわからせていないと、「わかりましたね」と言つてもそれは子どもなりの理解で、固定した解釈をしてしまつてゐるから難しいわけです。

そこで、話せない子どもを導くのは子どもを動かすのです。すなわち子どもに役割を与え、動きを通してことばを言わせるようにして、発表しようとする気持ちを盛上げさせることがよいと思います。例えば、当番、伝達係、みはり役、片付け役という役割を子どもに与え、「今日は伝達するのがあなたの役割です」という形で指導することが大切です。

小学校から幼稚園に望むこと

石田 ○ことは 今の子どもは数年前の子どもよりことばが豊富だと感じます。しかしそ

れは、系統的に発達したものでなく、断片的なことばです。例えば、「ヘソクリ」「夫婦げんか」ということばを知つてはいるが、これらはテレビやラジオで知つたものであつて、内容を理解してはおりません。

○字のこと 幼稚園によつては、平仮名を相当教えこんでいるところがありますが、これは小学校で一学期中かかつて教えるものです。平仮名に入る前にはまず、図形の違い、物と物との形の違いを区別する力を養つておかないと無理です。幼稚園からくる子どもの中には、「読み」は相当にできて「書く」ことは、往々にして左右を誤つたり、筆順が違つていたりします。しかもそのくせが出来るので、学校で教えるのにたいへんです。もし子どもが絵日記などに書く字を聞きにきたときには、正しい筆順を知らせるようにしてください。

○絵日記 私どもは小学校で指導するつもりですが、相当秀れたものを幼児でも書いています。絵日記には、絵だけで書かせる(第一期)、絵のみでは満足できなくなり、少

しの単語を入れる(第二期)、単語から短文へ移る(第三期)、やや長い文へいく(第四期)、文章表現が主になり、またそれに子どもが興味を持つようになる(第五期)という五つの段階がありますが、小学校一年の終りから二年中頃までには大半の子どもが第五期までいきます。書かせるねらいはあくまでも、物を見る目を養うこと、自分の一日の生活の中で、一番先生に話したいことや父母に言いたいことを絵に描いて、そこに文字を補うのです。すから、この絵は上手だからこの絵日記はうまい、ということにはなりません。

○ラジオ 子どもが10〜15分間静かに聞くのはいへん難しいのです。また、あらずじをつかむことなどは、小学校四年生ぐらいにならないと出来ませんから、小さな子どももほとんどその質問は小問切れで、例えば誰の話、何が出てきたかというような小きぎみな質問がよいと思います。

○全然話をしない子ども 小学校という大きな所に来たためかとも思ったのですが、そうではありませんでした。他の子どもが、「○

○ちゃんは話をしない」ときめているし、また自分で自分の能力をきめてしまっているのです。それでいて、家では話しています。このような子どもをなくすために、話さない子どもや話し下手な子どもが、ちょっとでも話そうとしたり話した時に、話しくい状況を作らないようにしてほしいと思います。グループ学習は非常に効果のあるものです。

○聞く耳 とかく先生は、子どもの発表をもう一度反復するくせがありますが、私はなるべく反復しないようにと思っています。このような習慣をつけると、友だちの言うことに耳を傾けずに、先生の言うことだけ聞くというふうになってしまうので、声が小さい、発音がはっきりしない、ことばがメチャメチャで他の子に通じないというとき以外は、じかに聞く耳を養うよう習慣づけていただきたいと思います。

聞く、話す態度を養う具体的方策

石田 私は、はじめは一对一で話すことに努めています。またその子のそばに、聞き上手な子どもや気のきいた子どもをつれていき、

先生も上手を目的としてその子に話をさせます。次にグループの中で話をさせ、その間に先生と話す機会を多くします。ひとりの子どもにばかり力を注ぐことは出来ませんが、できるだけ家庭での事情もしらべ相談して、その子が話すようになるよう努めています。

松村 この場合子どもの指導とともにそのまわりの者つまり親の指導が考えられます。

親を個人指導するのもよいが、母親の集まりなどがあつたときにその母親自身を話させるように努めます。座長などにするのもよいでしょう。小さなことからならし、集団の中の自信を母親にもつけると、子どもも自然になおります。

子どもの指導には次のことが考えられます。

(イ) 個人に焦点を合わせる指導

子どもの発表したい要求をひき出すために役割をもたせます。知らせる役、あと始末の役などが与えられると、それをことばで言うようになつてきます。すなわち、子どもの行動の中からことばが生まれてくるのです。

(ロ) 集団に焦点を合わせる指導

①三者面談法 自発的になるためには三人が効果的です。A、B、母の面談で、Bと母が話しているとき、Aは「そんなことを言ったら、お母さんはこう思っているのではないか」と母の気持を言ったりします。Bには言えないことがあっても、こんなことから気持がほぐれていきます。一対一も大切ですが、一対一ではその子に対する圧力が強くなるので、集団の中で動かすわけです。

②地位転換法 内気な子や、背の低い子を舞台の一段上へのぼらせて、上から下を見せると、今までより積極的に話すようになりませう。劇あそび、ごっこ遊びにおいても、舞台を使用して指導することが大切です。

③子ども同志の話をよく聞く これはある意味で、科学的うらづけをもった保育指導です。小グループにして、一番むこうとこちらのグループからひとりずつ立たせ、背後の同グループの意見に支えられて互に話をさせます。すると、ひとりの場合より自信がついて積極的になります。

劇化法―発達段階にそくした劇あそび

A 幼稚園で扱うものは、脚本どおり暗記するのではなく、遊びの中から延長の劇遊びが望ましいと思います。年令は三才でも、人数を考えれば出来ますし、五才でも程度の高いものを要求する必要はないでしょう。ままと遊びなどをするとき、父、母、その他の人になりきって発言してしまいますし、またその遊びとか劇の中で、話すことをくり返すことによつて勉強にもなっているのですから。

松村 幼児にとつて劇遊びは非常に大切ですが、ごっこ遊びとの違いがはっきりした形ではとりあげられていません。劇あそびは、行為をしながら話をし、子どもの生活自体を高めていくものです。また劇は脚本を自由に変わらされる利点もついています。劇をする上で大切なことは、全員が参加することです。幼稚園ではいろいろの役を与えて役割の可能性に気づかせることなどよいでしょう。

石田 小学校においては、完全な劇遊びをとらず、ことばの技術を養うために、教材の劇の中に織りこむことをしています。それによつて、ことばの抑揚、断続、発言、その他子

どもに実際に行動させ、そこから生まれていくことばを指導します。セリフがきまっているとこのことはおもしろくありませんから、教材によつては自分の好きなことばを言い、相手がそのあとに続けたります。例えば

Aがお母さんの言いつけではがきを入れていく。Bもいっしょにいく。犬もいく。ポストはぬりたてである。Bが「ぬりたてだから注意して」と言い、Aをだいてハガキを入れさせる。犬はポストにとびついて赤くなる。家に帰るとお母さんが「シロはどうしたの」と聞く。

このつづきをグループごとで劇にします。「おてつだいしよう」としてとびついた」「困ったわね、石鹼でおちるかしら」という具合にことばを考えていくと、これは子どもたちがその教材の内容について、それだけ深く理解したことになります。

正しいことばの指導

(1) マスココミュニケーションの影響によることば

松村 言語は社会の動きと共に変わるものです

から、これをはばむことは出来ません。テレビではすぐ反応するので、考えたり、話をよく聞くということがなくなってしまう。もちろん反応が早くなることも大切ですが、どこに重点をおくかをまず考えて、話をよく聞くとということをお忘れさせないようにしたいものです。また、修正のしかたによっては、子どものものにかなりなると思われれます。

(2) 方言

石田 小さいときに、無理に正しいことばづかいのわくの中に入れてしまうと、子どもの自由なことばの表現を縮め、発達をはばんでしまいます。あまりメチャメチャでは困りますが、はじめて他県から来て一年生を受持った先生が、方言を使わないように努力すればするほど子どもは先生から離れていく、というように標準語に抵抗を感じてしまう場合もあります。小さい子どもは共通の理解力、使用は出来ないのですから、無理に押しつけないで、正しいことばをだんだんに教えていくことが望ましいと思います。小学校一、二年では、先生に言うことばはなるべく教科書に

のっている程度のことばを使うようにしますが、あまりやかましく言う子どもは表現力が縮んでしまうから注意します。

(3) 語法

助詞の誤りは言語意識が不十分であることにも原因しますが、小さい頃からあいまいにされた発音がそのまま通ってきた場合に多いようです。これを急に直すことは難しいので、ふだんから正しいことばを指導するようにし、子どもにも、どうしてまちがったかという意識の過程を理解させるようにします。例々あつめた石の名まえがあんまりよくしりませんでした”は「わからなかった」という意識をもちながら「しりませんでした」となってきた。これをすぐ「を」になおすのは考えものである。

幼稚園では、ある程度使いわけるといいうらいでよいでしょう。順序が違ふとか文法に合わないとか言つてやかましく言うことはありません。特に幼稚園の先生は、文法意識を強くもたないようにする方がよいと思います。

(お茶の水女子大学付属幼稚園にて)

幼児の教育 第五十七巻 第十号

十月号 © 定価五十円

昭和三十三年九月二十五日印刷

昭和三十三年十月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼

発行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌の購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。